

小児科学

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
(1)小児てんかんの病態解明研究 良性家族性新生児けいれんの発作発現機序解明のために、ノックアウトマウスを作成し、けいれん域値の変化、マウス脳内神経伝達物質の変化、等について検討する。	大澤教授 永木准教授	1
(2)テオフィリンのけいれん誘発における作用機序 テオフィリンは小児気管支喘息の治療に用いられるが、治療中にけいれんが誘発されたと報告されている。そこで、テオフィリンのけいれん作用機序を in vivo dialysis を用いて興奮性アミノ酸、GABAについて検討する。	大澤教授 永木准教授	1
(8)新生児未熟児の視覚認知発達とその障害 発達促進に必要なサポートについての検討 新生児未熟児医療の発達により超未熟児などの救命が可能になり、乳児死亡率は著しく低下している。が一方で周産期に濃厚な医療を要した児で広汎性発達障害など軽度発達障害などの発生も多いと報告されている。それらの実態を調査すると共に、乳児の視覚認知、対人関係の発達評価など従来の発達テストよりさらに詳細に評価する方法を確立、未熟児出生の児などにみられる発達特性を明らかにし、どのような発達サポートが有効などを検討する。	平澤准教授	1
(4)小児てんかんの外科治療の適応に関する研究 15歳以下でてんかん外科治療を受けた症例の発作予後、知的予後を検討し、各症例のてんかん発症年齢、発作型、画像診断、脳波診断を基にその最もよい適応を調べる。	大澤教授 小国教授	1
(5)難治性小児てんかんにおける神経心理学的研究 難治性小児てんかん患者の知的障害の発展過程を調べるために高次脳神経機能検査を継続的に行い、てんかん源性焦点の部位と選択的高次脳神経異常の関連を検討する。	大澤教授 小国教授	1
(6)てんかん発作の神経生理学的研究 てんかん発作、特に小型運動発作の神経生理学的病態を検討するために、発作時ポリグラフをA/D変換し、コンピュータに記録、脳波解析装置を使用し、運動症状の始まりを起点とし脳波を加算し、その脳波発射と運動症状の起点との潜時を計算する。	大澤教授 小国教授	1